

別のものが掲げられている。

- 26 拙稿「安宅切料紙下絵の特殊性」〔美術研究〕二八四、昭和四八年）。
- 27 拙稿「新出の金剛証寺蔵紺紙金字莊嚴經」〔美術研究〕三二四、昭和五五年）に紹介した。
- 28 拙稿「法隆寺伝来紺紙金字梵網經の表紙絵」〔美術研究〕三二二、昭和五五年）に紹介した。
- 29 両者とも、陝西省博物館内の碑林所在。挿図3、4は、王子雲編『中国古代石刻画選集』(中国古典芸術出版社、一九五七)による。
- 30 挿図5は、出土文物展覧工作組編『文化大革命期間出土文物』一(文物出版社、一九七二)より。
- 31 蘇芳地金銀絵箱の脚底には神護景雲年間(七六七―七七〇)に建立された東西小塔院の一つの名「東小塔」の墨書銘があり、碧地彩絵凡は付属の褥の端に(前略)以神護景雲二年四月三日 幸行 猷大仏殿 東大寺」の七六八年の墨書銘がある。挿図6は正倉院事務所編『正倉院の絵画』(日本経済新聞社、昭和四三年)より、挿図7は正倉院事務所編『正倉院の木工』(日本経済新聞社、昭和五三年)より。
- 32 松原三郎「盛唐彫刻以降の展開」〔美術研究〕二五七、昭和四三年)参照。挿図9、27は同論文より。
- 33 挿図10は、敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟』三(平凡社、昭和五六年)による。
- 34 挿図12は当研究所所蔵の拓本、挿図14は、奈良六大大寺大観刊行会編『奈良六大大寺大観』東大寺二(岩波書店、昭和四三年)より。
- 35 挿図16は、陝西省博物館、陝西省文物管理委员会編『唐李潤墓壁画』(文物出版社、一九七四)より。挿図17は、関野貞、常盤大定『支那仏教史蹟』二(東京仏教史蹟研究会、昭和二年)より。
- 36 挿図20は、『定本書道全集』七(河出書房、昭和三二年)、挿図21は、西川寧編『西安碑林』(講談社、昭和四一年)による。
- 37 野村耀昌「中国文化と法華仰鑽史の連関」(坂本幸男編『法華經の思想と文化』、平楽寺書店、昭和四〇年)。見返し絵のある実例としては、「文物」一九八二―六に遼刻の、妙音品ではじまる法華經卷第八が報告されている。
- 38 兜木正享『法華版経の研究』、平楽寺書店、昭和二九年。
- 39 挿図22は、敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟』二(平凡社、昭和五六年)による。
- 40 John Rosenfield *Japanese Arts of the Heian Period: 794-1185*, Asia House Gallery, New York, 1967 参照。挿図23は、註8の論文より引用。
- 41 註3に同じ。
- 42 註8に同じ。
- 43 註27に同じ。
- 44 拙稿「神光院蔵紫紙銀字心経莊嚴画の山水表現」〔美術研究〕三〇一、昭和五〇年)。
延曆寺蔵紺紙銀字法華經の莊嚴画

45 挿図26は、敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟』三(平凡社、昭和五六年)による。

46 挿図28、30は、任昌淳編『韓国美術全集』一一(同和出版公社、一九七五)より。挿図29は、『定本書道全集』七(河出書房、昭和三二年)より。

47 ⑤は、蘇州市文管会、蘇州博物館「蘇州市瑞光寺塔發現一批五代、北宋文物」〔文物〕一九七九(一一)を、⑥は、黄寿永「新羅白紙墨書華嚴經について」〔仏教芸術〕一二七、昭和五四年)を参照。ただし、⑥の表紙と本紙の關係はなお若干の検討を要する。日本所在で直接調査の機会を得ていないものは、文化庁監修、毎日新聞社編、刊『重要文化財』二〇(昭和五〇年)などによる。

48 註27に同じ。

49 註1に同じ。

50 註10に同じ。

51 註27に同じ。

52 註2に同じ。

美術研究所報

研究会 昭和五十八年

四月二十七日 大阪延命寺の清涼寺式釈迦像ほか 猪川和子

六月二十九日 沈南蘋の周辺 鶴田武良

十一月三十日 片倉家伝来小紋胴服(重文)の復元模造について 神谷榮子

美術部・情報資料部公開学術講座

第十七回公開学術講座を昭和五十八年十一月十二日(土)午後一時三十分より四時三十分まで、日本経済新聞社小ホールにおいて左記のとおり開催した。

歌仙絵 真保 亨

アスターナの絵画 上野アキ